

「劇場におけるアウトリーチ～ダンス・プログラムの可能性～」

講演

「国内事例 DANCE BOX におけるダンスのアウトリーチ」

横堀ふみ

(DANCE BOX プログラム・ディレクター)

ダンスボックスの前提

私たちは、1996年に大阪で活動を始めて2002年にNPO法人化し、大阪のフェスティバルゲートというアミューズメント施設が混在したビルの中でArtTheater dBという初めて拠点劇場を設置しました。こちらは大阪市との公設置民営の中で運営をしていたのですが、元々は10年プランで作られたものでした。しかし、5年目にして大阪市の方から予算がなくなったために場所は廃止と宣告され、そこから1年強は多目的室のような場所で活動を継続しながら、2009年に神戸市の方から今の劇場ArtTheater dB神戸のスペースに招致していただいて、今の運営をしているという前提があります。

ダンスボックスは、次の三つの要素を絡ませながらプログラムを作っています。一つ目は主にコンテンポラリーダンスを取り扱っているということ。二つ目に劇場が拠点であること。三つ目に新長田に位置しているということです。

ダンスボックスは1996年に始動し、コンテンポラリーダンスの携わるアーティストが自分たちの表現の場を獲得するために生まれた団体です。ダンスボックスの成立の目的はダンスの創造環境の整備、集合体として大きな力を持つことが第一にあります。新長田にて劇場を拠点とした以下の三つを運営スペースとしています。

客席数約100席の劇場ArtTheater dB神戸、地元のダンスグループが貸スタジオとして運営するスタジオDB神戸、海外や県外等から来たアーティストが滞在制作するためのゲストハウスことおき荘の三つです。

新長田は、阪神淡路大震災によってコミュニティの在り方が崩壊し、現在復興途中にあるという場所です。更にお年寄りの方が多く、在日韓国人・朝鮮人・ベトナム人・中国人・フィリピン人などアジアを中心とした外国籍の方も多く、また、奄美諸島や沖縄からの移住者コミュニティもあります。

ダンスボックスは上記三つの要素を絡ませながら、創る現場・交換する現場・見せる現場が循環する場となり、集う場となることを目指しプログラムを作っています。

アーティストが常に滞在し、彼等の創作現場かつ地域の様々なコミュニティと共同する現場を目指しています。

ダンスボックスの事例

プログラムは三つの柱を持っており、一つはアーティストの活動と共同、育成、支援するプログラム。二つ目に国際交流プログラム、三つ目に地元のコミュニティと共同するプログラムです。一つ目のプログラムは主に国内ダンス留学@神戸とコンテンポラリーダンス@西日本版を柱としています。国内ダンス留学@神戸は2012年に設置しました。プロフェッショナルなダンスアーティスト及び舞台芸術制作者として独立した活動を展開出来ること、次代のダンスシーンを牽引することができ、さらに国内外の劇場やフェスティバルで幅広く活動することができる人材の育成を目的としています。こちらは8ヶ月のプログラムで、専門性の高いカリキュラムを成立させるために国内外の第一線で活動しているアーティストや批評家、研究者、制作者を講師として迎えています。

現在は振付家コースとダンサーコース、制作者コースの三つのコースがあり、最終段階として参加者による作品制作と発表の場を設けています。最初は、振付家コースの参加者が、ダンサーコースの参加者を選び一緒に作品を創ります。作品のステップ・アップとして優秀作品の選出をし、20分作品を60分のフルレングスに再創作した上で再演の機会を提供しています。

きちんとフルレングスの作品を作成できる力を身に付けることや、自らで考え発想し、それを伝える力を養うこと、セルフプロデュースが出来る人材の育成を視野に入れて制作者コースも設けています。

新長田の住民の方々には若い子を応援しようという気運があり、創る場と生活の場が密接に重なり合っています。参加者にとって様々な出会いがあり、劇場で展開される他の様々なプログラムを自ら体験することで、自ら環境を作っていく時の手段について観察できる点は実践を伴ったプログラムといえます。

国際交流プログラムは、「ダンスボックス・レジデント・プログラム」と「神戸-アジア コンテンポラリーダンス・フェスティバル」の二つを展開しています。レジデント・プログラムでは、震災で被災された方々へのインタビューを通して、震災の記憶がどのようにこの街に残っているのかということを取りサーチ作品として製作し、ダンスボックス近くの昔使われた小学校を舞台にインスタレーションを行ったアーティストがいます。

「神戸-アジア コンテンポラリーダンス・フェ

スティバル#2]では、新長田という文脈、そして関西のコンテンポラリーダンス・シーンという文脈に深く関わった作品やプロジェクトを紹介するという、また他者との共同作業を通じて創作された作品を紹介するという、ダンスとは?という問いかけを、常に応答し往診し続けている作家の作品を紹介すること、この三つにフォーカスを当てました。「神戸・アジアコンテンポラリーダンス・フェスティバル#3」では、新たな試みとしてアーティストをプログラム・ディレクターとして招き、ダンスだけでなく、他ジャンルのアーティストが共同して新たな組み合わせが生まれていく育みの場ということも大事にしています。

国際交流事業において、創作資源は地域の文脈であり、アーティストと我々の活動が地域の様々なコミュニティや人々を緩やかに繋げる可能性をもち、地域の異なる側面を可視化させているということも実感としてあります。

次に新長田のコミュニティと共同するプログラム。こちらも主に五つのプログラムを同時進行させています。「新長田のダンス事情」事業、「みんなのフェスティバル」、ミニ冊子「長田ルンバ」の発行、「踊るまち新長田構想」、「コミュニケーション教育事業」でアーティストを学校に派遣するというプログラム等を行っています。「新長田のダンス事情」事業は、新長田で踊る人に会いに行くということをコンセプトにしていて、我々が拠点を移した時にまずダンスを通して街を知ろうと始めました。実際の基礎訓練や稽古場の見学や発表会にお邪魔をしてリサーチを深めています。

更に現在はリサーチだけでなく出会いの場としても展開させ始め、新長田で踊る人とコンテンポラリーダンスの振付家や演出家、現代美術家を実際に会って、協働しながらの作品創りを試みています。新長田には本当に沢山の踊る人がいるのですが、それぞれ独自に活動されています。我々の役割としてコミュニティとコミュニティを出会わせるということも可能なのではないかと思います。

次に「みんなのダンスフェスティバル」です。こちらはホワイトボードにスタッフが思い思いにメモを書き、そこからプログラムを立ち上げています。「全ては連帯してなくてもいいでもいい、一人であることを確認する場」、「知らないことと出会う、自分の領域を広げる」といったキーワードを集め、子どもたちが映画を作るプログラムの発案や地域のお父さんの存在の方々による勉強会の開催に繋がりました。

次に「長田ルンバ」です。これはダンスボックスが出しているミニ冊子ですが、地元住人の方にインタビューをした対談記事などを掲載しています。「踊るまち新長田構想」では、長田区と共同して新長田発のエクササイズを作ろうとしています。住民の普段の運動等の実践について簡単なアンケートを取りながら、新長田の町の方々の動きから振りを創っていけたら面白いのではないかと考えています。次に文部科学省の「児童生徒のこ

ミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験」では、アーティストを学校へ派遣しダンスのワークショップを行っています。2012年は5校の小学校へ行きました。

ダンスワークショップに参加した子どもたちが、その後映画を作るプログラムに参加するなど、新しい繋がりも生まれてきています。このように、教育現場であったり地元の障がい者の作業場に定期的に出向き、ワークショップを行ったりしています。様々な領域を繋げるということもダンスボックスの大切な役割であろうと思っています。

### ダンスボックスを通じた今後の展開

今後の課題の一つとしては、紹介したプログラムを運営・展開していくための人材育成について、人材育成については非常に時間がかかると思っています。

最後に、劇場が起点であること、劇場とはどのような場所であるのかを、プログラムを通して我々が得ている実感というものは、まずくアーティストにとっての劇場>では、安定した創作現場実践の場を提供する、そこにあると考えています。

いろんな場所に行って、上演して、作品を創って、また帰って来れる場所。我々の大事な仕事だと思っているのはアーティストのための仕事を作り、帰って来られる場所になることです。

また、<観客にとっての劇場>では、肩書きや役割を離れて一人になれる場所、そして新たに出会い対話を重ねることのできる場所です。

最後に<地域にとつての劇場>です。様々なヒエラルキーから離れた風通しの良い場所であり、様々なツール・思想・信条をもつ人々、コミュニティが混在できる場所であると考えています。ダンスボックスは避難施設としても指定されていて、地元の震災時に防災の第一線で活躍していた方々から防災について勉強し我々がどういった体制でいるべきであるのか、今進めているところです。

本当に劇場が原っぱのような場所になれば、という風に思いながら、プログラムを私たちが作って生まれていくというよりも、もしかしたらもっと色々な人が関わりながら勝手にプログラムが生まれて育まれていくような場所になれば面白いのではないかと思います。

### パネルディスカッションの風景



(Photo: Hatori Naoshi)